

南日本新聞掲載

令和7年12月23日(火)

歯のはなし

矯正歯科治療で、拔歯をすることがあります。一方、健康な歯を抜くことに抵抗を感じる人や、拔歯を希望しない患者さんも少なくありません。

近年、「歯を抜かない矯正」をうたう治療法を目にすることが増えています。矯正歯科治療における抜歯の歴史を振り返り、その背景について紹介します。

1890年頃、米国に「近代矯正学の父」と呼ばれるエドワード・H・アンダーソンという歯科医師がいました。彼は、近代矯正歯科学の発展に大きく貢献した人です。彼が行つた矯正歯科治療は、歯を抜かない治療でした。

矯正治療



抜歯のイメージイラスト(鹿児島県歯科医師会提供、写真ACから転載)

その後、30~40年代にアングル氏の弟子であるチャールズ・H・ツイード氏が、非抜歯矯正歯科の治療後に歯並びが悪くなる症例に直面します。拔歯をして再治療した結果、非抜歯治療に比べて良好な成績を得られた症例が報告されました。

この歴史から、歯を抜かない矯正は19世紀から続く古典的な治療法で、抜歯を伴う矯正の方が後に確立された治療法であることが分かります。そして、抜歯をした方が結果が良かつたのです。

しかし、抜歯をしなくともきちんと治療できる症例もあります。現在の矯正歯科治療では、抜歯・非抜歯はきちんととした診断に基づいて決定されますが、「歯を抜かない矯正」という言葉だけで判断せず、納得できる説明を受けることが大切です。

抜歯は説明受けて判断を

邊紀章
(県歯科医師会医療管理委員会・川